

流行病と予言獣

常光 徹

Epidemic and Prophet Beasts

TSUNEMITSU Toru

はじめに

- ① 姫魚の周辺
- ② 予言獣をめぐる人々のうごき
- ③ 件の予言と戦争

【論文要旨】

予言獣とは、豊作や疫病の流行など未来のことを予言したあと、除災の方法を告げて消え去ったという異形のモノをいう。広い意味で妖怪の範疇に含まれる。江戸時代後期から摺物や錦絵などに登場し庶民の関心を呼んだ。女の顔に魚体が結びついた神社姫や姫魚をはじめ、人面牛身の件、猿の顔に三本足のついたアマビコなどいずれも異様な姿をしている。予言獣を描いた絵図は、庶民のあいだで主に悪病除けの目的で求められ呪的な効果が期待された。予言獣にまつわるうわさは明治以降にもしばしば流布し影響を及ぼしている。本稿では、国立歴史民俗博物館が所蔵する姫魚やアマビコの資料を紹介するとともに、流行病と予言獣の関係を論じた。

第一章では、文政二年（一八一九）に肥前国に現れたとされる神社姫や姫魚をとりあげて、それが文化二年（一八〇五）に話題になった怪魚や人魚圖（ヒトウシロコ）と共通する形態をもっていることを確認した上で、それぞれの絵図に記されている内容の異同について明らかにした。とくに、神社姫や姫魚が告げる豊作や流行病の予言と除災の内容につ

いては、先行する知識を借用しつつ新たな工夫を施していることを明らかにした。

第二章では、文政二年夏に江戸で流行した痲病と神社姫の話題が密接にかかわっていたことを指摘し、人々の不安な心理に逸早く反応しながらうわさが流布していったことについて述べた。また、不安の兆しを敏感に嗅ぎ取り、巧みに効用を喧伝しながら予言獣の摺物売りさばっていた人物の活動の一面について、近世の随筆類や明治初期の新聞記事をもとに論じた。

第三章では、悪疫の流行だけでなく予言の対象に戦争という言葉が入ってくる明治後期からの記事を取り上げ、とくに第二次大戦中に件が生れて終戦を予言したとうわさに注目した。予言には、人々が心の中に抱えている不安の表出という側面がある点について述べた。

【キーワード】予言獣、流行病、神社姫、姫魚、件、アマビコ